

平成 23 年 4 月 13 日

## 福島大学放射線計測プロジェクト

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、地震とそれに続く津波により東京電力福島第一原子力発電所に大きなダメージを与え、いまなお広い範囲にわたる放射線の影響が懸念されているところです。このような中、地域に根ざす国立大学として客観的な調査の上、正確な情報を提供していくことは非常に重要な使命であると考えています。放射線は目に見えないため、さまざまな機器を用いてデータを集め、また解析していく必要があります。また福島県という広くて環境も多様な県土において調査を進めるためには、単なる放射線計測の知識だけでは不十分であり、生態や地質などのフィールドワーク系の経験も欠かすことができません。福島大学共生システム理工学類では原子力発電所の事故の後、福島という地に生活する同じ県民としてそれぞれの専門性を活かしながら地域に貢献したいという有志の教員が集まり、放射線計測プロジェクトを行うチームを立ち上げました。種々の関連機関と情報共有しながら、地域の国立大学としての役割を果たせる調査を進めていきたいと考えています。

下記 HP も参照ください。

<http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/FURAD/FURAD/top.html>

## 福島県北部エリア放射線レベルマップ

原発事故からこれまでに福島県内の放射線レベルについて、いくつかの機関から公表されていますが、いずれも特定の測定地点におけるいわば点データとしてのものでした。福島大学放射線計測チームでは、均質な計測条件のもとに 2km 四方ごとの測定を行い、放射線レベルの全体の分布がどうなっているかを調査しました。その結果が次頁に示したマップです。このように面データとして分布を明らかにすることで、いろいろなことがわかりました。主な点をあげておきます。

- 1) 放射線レベルの分布は単に原発からの距離だけでなく、その方向によって大きく異なること
  - 2) 原発から西北方向への流れとは別に、郡山市・福島市を含む中通りには別経路で流入した可能性があること
- 今後、この分布を示した地図を元に、気象条件や地形などとの対応を明らかにし、また各種シミュレーションの検証も行っていきたいと思っております

詳細な条件等は HP をご覧ください。

平成 23 年 4 月 13 日

## 今後の活動

行政等の各機関と情報共有をしながら、大学ならではの調査を行っていく。  
今後の調査予定のいくつかの例をあげておく。

- 1) 土壌・水についての放射性物質のひろがり
  - ・土壌の形態および深度によるセシウムの分布調査
  - ・核種の比率測定および今後の地表からの放射線レベル推移予測
  - ・水中放射性物質の移動経路調査
  
- 2) ラジオゾンデによる大気の放射線観測
  - ・バイサラ社が保有している放射線測定センサーを用いて高層観測を実施し、グローバルな放射性物質の拡散状況を把握する基礎データとする
  - ・4月13日から5月2日の20日間
  - ・以下四社の社会貢献事業によって支援される観測である  
Vaisala (Finland, Helsinki)、NTTデータ、三興通商、  
トーテックス株式会社
  
- 3) シミュレーションとの対応（放射性物質の流入過程）
  - ・SPEEDI等のシミュレーションと我々の実測データを比較の上、シミュレーションの精度を検証

(お問い合わせ先)  
共生システム理工学類  
教授 山口克彦  
電話：024-548-8189